

1. 見える道と見えない道

「道」には、車道や歩道のように「見える道」と、柔道や剣道のように「見えない道」がある。後者は概念あるいは哲学？、そして体感の世界である。ここでは、「ユニバーサルデザイン（以下、UD と略す）への道」と称して、「見えない道」の教育実践を紹介してみたい。

2. UD との出会い

いずれは皆、体の諸能力は衰え、体の不自由な身となる。誰もが避けては通れないものである。であるなら、子どもたちに今の内から、ユニバーサルデザインという考え方を身につけさせておきたいと考える。UD とは、老若男女、障害のあるなしに関わらず、すべての人が暮らしやすい、使いやすいようにデザインされた施設やモノを言う。

では、どこでどのように、この概念と出会わせるか、そこが問題となる。得てして、教員は「A」という事柄を単刀直入に「A」と教えがちなところがある。しかし、これでは子どもたちは乗ってこない。概念の意味から入ったら、何事も失敗である。

昨年から学校現場では、「総合的な学習の時間」というのが設けられた。私は、4年生35人に対し、この時間に「UD を探そう」という単元を開発、実践してみた。

UD 商品の数々を班ごとに回して問うた。力のいらぬクリップやはさみ、ボールペン、左右両利き用カッター等々である。

「これは、何だと思えますか。何に使うものか、考えてノートに書きなさい」

いろいろな意見が出されていったが、体の不自由な

人が使うものではないか、ということに落ち着いていった。

3. UD とは？

出会い直後は、子どもたちはバリアフリーとUDを混同しているが、それはそれで構わない。そこで、UD の概念を知らせるために、新聞記事を利用する。熊本県は、UD に力をいれているためか、新聞記事に月に1度はUD のことが登場してくる。もちろん、その記事に使われている漢字にはフリガナを打って、UD の教材とする。さらに、UD の7原則というものも教える。その後、UD についての学習課題づくりをさせていく。

4. UD の視点

「UD は、何もモノだけではないのです。施設にも使ってあるわけです。そこで、皆さんに実際に探検してもらい、UD を探してもらいたいのです。」

子どもたちは、教室外の学習を事のほか、喜ぶ。早速、近くのショッピングモールを探検させる。6つの班に分かれ、数人の保護者同伴で探検活動に入る。子どもたちは、得意気になって戻ってきた。各自が「あった、あった」と。

学校に戻ってから発表会をする。各班、いいものを目をつけているが、入り口の受付に気づいていない。そこで、その写真を提示して、問う。

「このどこが、UD なのでしょう。」

ある子どもは、上に書いてある「INFORMATION」という文字に目をつけた。曰く、「日本語と英語でかいてあるので、外国人にもよくわかる。」と。子どもたち



車椅子を使って、
県立図書館をUD探検する子どもたち

の頭は柔らかい。なるほど、そんな視点もあるなど、こちらがびっくりした次第だった。言いたかったことは、受付台が高いのと低いのと2カ所あるということだった。つまり、低い方は、車椅子や小さい子にとって、とても便利であるということである。

「UD と見抜くには、どんな見方をすればいいでしょうか。」

これまた、いろいろな意見が出された。そして、「お年寄りや赤ちゃんを抱いたお母さん、車椅子の人などになったつもりで、見ていくようにする。」とまとめた。

5 . UD 探検

各班に出かける場所は任せる。地図とタウンページを使って、場所を選定し、探検の許可を電話で行う。もちろん、電話をかける前に、事前に私の方で許可を頂いておいた。幸いにして、本校は市中心部にあるため、県立養護学校、老人ホーム、市立体育館、県立図書館、県庁などが近くに存在している。各班、保護者同伴の元、3時間程のUD探検に出かけていった。

探検前に数回、次のことを押さえていった。

「私たちは、なぜUDの学習をしているのでしょうか。」

答えは「自分のため」である。この動機がわかっているのと、いないのとでは、当然学習内容に開きがでてくるだろう。

6 . 提案型学習

熊本県には「県知事への直行便」「市長への手紙」というシステムがあり、これを利用して「報告集」と「提言集」を送付した。やはり、子どもたちもりっぱな市

民であり、県民である。ならば、学習と社会が切り離されないように、「こうあったらいいな」というものを社会に対して訴えていくような学習にしていきたいと実践してみたことだった。県知事そして市長さんから返事を頂き、子どもたちもうれしがっていた。

7 . パソコンでUD学習

総合学習の特色の1つである情報教育の一環として、最後はパソコンを使って、UD学習を行っていった。今までの学習のまとめをワープロで行ったり、自分の理想とするUD的なモノをお絵描きソフトで表現したり、インターネットで調べて課題を解決したりという学習である。例えば、ワープロでまとめている子に対して、「こんなに小さい文字でお年寄りや視力の悪い人は、読めるでしょうか。」「あなたが何を言いたいのか、一目でわかるように、色を変えたり、字体を変えたり、枠で囲ったりしていくといいよ。等と助言を加えていった。つまり、情報のUDである。

8 . UD効果

本校は創設以来、隣の養護学校との交流学习を、4年生を中心にさせてもらっている。この学習の最中、次のような子どもの発言を耳にした。共同で作品を仕上げる時、鉛筆を持つのが不自由な養護学校の子に接して、友達と「あのUDのペンをもってくと良かったね」と。教室での学習が実際の交流に生かされたなと実感した瞬間であった。また、一方では、休日に親子でUD探検をしたり、自由研究をしたりしてくる子どもたちがでてきた。そして、県の推進するUD紹介のシンポジウムやテレビ番組にも参加でき、そこでも社会貢献することができたのでは、とも理解している。

9 . 私自身の変化

この学習以来、教育のUD化が大切だと思うようになった。もっと、子どもたちや保護者に納得のいく教育をと考えるようになり、少しずつ努力しているところである。

人々が各自の生活でUD化を考えていくことで、世の中は一度によくなっていくような気がしている。それは、自分のためなのでもある。

(熊本市立出水南小学校教諭&仏教大学院在学中)